

ドイツでは、国が管理するエルベ川、ドナウ川、ライン川などの国際河川とその支流を対象として、水域の重要なビオトープを保護し、ネットワークする「ブラウエバンド」(Blaue Band、青いつながり)プロジェクトが2015年より進められています。その一つ「ハーフェル川下流域低地自然再生プロジェクト」について紹介します。

ドイツ東部を流れるハーフェル川(全長約325km)下流の低地には中央ヨーロッパでも最大級の内陸湿地があります。このハーフェル川流域は、約1,000種もの絶滅危惧種や保護種が記録されるなど、自然保護の上でも非常に重要な場所です。しかし、この流域では、20世紀に河川の直線化や湿地の喪失などにより、深刻な環境悪化が生じていました。

そのハーフェル川沿いの延長約86km、面積は約9,000haを対象とする、欧州でも最大級の自然再生プロジェクトが行われました。

このプロジェクトでは、川の流れと氾濫原をもとの自然の状態に戻すため、蛇行する流れを取り戻すとともに、堤防を川から内陸側に寄せる「引き堤」や、護岸の撤去、ダムの撤去などの取り組みを行っています。

こうした自然再生の取り組みは、野生生物の生息環境を改善するだけでなく、氾濫原の遊水機能を高めることで、下流における洪水の緩和にも役立ちます。さらに、川の自然を取り戻すことで、美しい景観が生み出され、それに伴う観光客の増加が地域の活性化にもつながっています。



流域には、ヨーロッパコウノトリなども生息しています

グランドデザイン総合研究所は、自然と共存する美しいまちづくりの方法を、行政や議会、市民に提案するシンクタンクです。お気軽にご連絡ください。

(公財) 日本生態系協会

グランドデザイン総合研究所 tel. 03-5951-0244

- 50 年先、100 年先の世界にひとつのグランドデザイン作成
- 海外の先進事例に関する情報提供
- 国の事業を活用した自然と共存する持続可能なまちづくりの提案
- 海外視察ツアーの企画・コーディネート
- 行政職員や市民向けの研修会や講演会への講師派遣
- あなたのまちをテーマとした国際シンポジウムなどの企画・開催

つかさどる人の NEWS

NO.41
2017.5 発行

(公財) 日本生態系協会
グランドデザイン総合研究所

〒171-0021 東京都豊島区西池袋2-30-20 音羽ビル
tel.03-5951-0244 <http://www.ecosys.or.jp>

川から流域へ 生態系ネットワークを活かした地域づくり



ドイツ ブランデンブルグ州

今、日本では川を中心とした生態系ネットワークづくりが各地で進められています。

自然からの様々な恵み(生態系サービス)によって支えられている私たちの生活には、良好な自然がその基盤として欠かせません。生態系ネットワークとは、生きもののすみかとなる優れた自然をつなげる考え方で、それにより生物の多様性の豊かな自然が実現します。

生態系ネットワークがつくられることで、生きものがさらに豊かになり環境が良くなるだけでなく、地域の魅力や経済の活力が向上することが期待されます。各地ですすでに行われている様々な取り組みには、多くの人々が訪れています。また、地域を代表する生きものの存在は、人々の地域への愛着や誇り

の向上につながります。つまり、生態系ネットワークづくりを進めることで、地方創生にも貢献しているのです。

早くからこの考え方を地域づくりに取り入れてきたヨーロッパでは、国の土地利用の戦略のなかにも生態系ネットワークづくりを組み込んでいます。そして、日本でも「国土形成計画」や「生物多様性国家戦略2012-2020」など、国づくりの基本計画において生態系ネットワークをつくる考え方が位置付けられました。2015年に作られた「社会資本整備重点計画」では、具体的に生態系ネットワークづくりを進めるために、特に川を中心とした広域での取り組みを強化することが示されました。

生態系ネットワークの考え方は1980年代に欧州で先進的に取り入れられました。日本生態系協会では、その前後から欧州の複数の国へ視察に行き、その考え方をいち早く研究、またシンポジウムを開催するなど、その考え方を広く発信してきました。

グランドデザイン総合研究所では、海外視察や各地での取り組み支援により蓄積されたノウハウを活用して、生態系ネットワークを活かした持続可能な地域づくりを支援しています。

関東エコロジカル・ネットワークでは、国土交通省、自治体のほか、地域の企業や NPO 等が取り組みに参加し、コウノトリ・トキをシンボルに魅力的な地域づくりを推進しています。写真は千葉県野田市で放鳥されたコウノトリが埼玉県比企郡川島町の田んぼへ飛来した様子

■地域での連携

生態系ネットワークを活かした地域づくりには、自然や気候条件などの地域の特性と併せて、企業、団体、自治体などが持つ地域のニーズや課題を反映させることが重要です。

私たちは、専門組織として中立の立場で地域の方々との対話を通じて、地域のニーズや課題を的確に把握し、また、企業、団体、自治体等との連携を促進して、効果的な地域づくりを目指す取り組みを支援しています。

■取り組みにはシンボルを

生態系ネットワークの取り組みでは、特定の生きもののための環境をつくるのではなく、生態系全体の質を高めることを目指しています。一方で、取り組みの進捗状況を把握するためには、指標種を選定することが効果的です。対象となるのは、その生きものがすんでいることで生態系が健全であることを示す、生態系の上位にいる捕食者や、その地域に固有の生きものなど取り組みのシンボルとなる生きものです。選定の際には、すんでいる生きものの調査などに基づく検討に加え、地理的な条件や気候や風土といった地域の環境や歴史資料などを元に過去に生息していた生きものなどに関する情報も参考にする必要があります。

なお、選んだ指標種のくらしやすさを、環境調査などで得られる科学的なデータを使って数字として示すことも、取り組みの進み具合をとらえるために有効です。

このような形で選ばれた取り組みのシンボルを活用することで、人々の興味や関心が高まり、取り組みの勢いが増す効果も期待されます。

■実践的取り組み事例（舞鶴遊水地、北海道長沼町）

北海道の中央部に位置する千歳川の流域では、治水の安全性を高めるために、国土交通省北海道開発局が遊水地の整備を進めています。そのうちの一つ舞鶴遊水地（長沼町）では、整備中にタンチョウ（国指定の特別天然記念物）が飛来したことをきっかけに、地域の住民の中から、タンチョウがすめる地域

ハクチョウ類



ガン類



ツル類



コウノトリ・トキ



大型水鳥類は生態系の広域的なつながりを示す代表的な生きものです。多くの人が見ることができ、国際的な保護の要請にこたえることにもつながります

づくりの機運が高まりました。

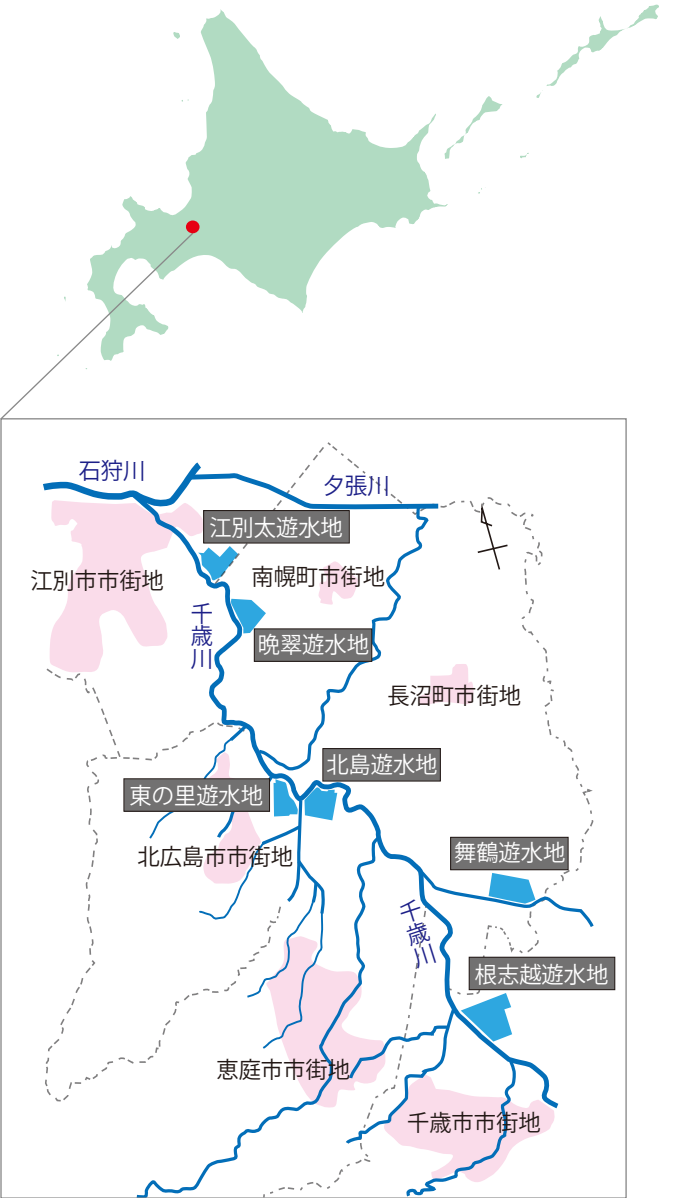
現在、タンチョウは生息地が北海道の東部に限られていますが、環境省や研究者の調査では、北海道のその他の地域でも生息する可能性の高い場所が複数あり、その中には千歳川の流域も含まれています。また、過去の記録などにより、千歳川流域の広い範囲でかつてタンチョウがくらしていたことがわかりました。

地域住民の要望を受けた長沼町では、北海道開発局と協力して地域づくりに関する協議会を2016年9月に設立しました。協議会には、自治体や関係機関、学識経験者のほか、地域の様々な立場の方が委員として加わっています。舞鶴遊水地でタンチョウが巣をつくることを当面の目標にして生息環境づくりに取り組み、できあがる豊かな自然を観光や教育、産業の振興などに活かすことで、魅力ある地域づくりを始めています。

※当協会では長沼町（政策推進課）に職員を派遣し、タンチョウと共生する地域づくりを支援しています。



2016年8月に舞鶴遊水地に舞い降りたタンチョウ（撮影：北海道開発局札幌開発建設部）



千歳川の流域ですすむ遊水地の整備
※北海道開発局ほかより（公財）日本生態系協会作成